

# 戦争の記憶

田村 鈴子さん（昭和7年生まれ）

私は現在92歳（令和6年時点）、最近では昨日今日のことは思い出すのに時間が掛かりますが、82年前の出来事は今も走馬灯の様に思い出されます。

昭和16年の夏休みの事でした。当時私は小学四年生、学校の屋上で友達と写生をしていた時、翼と胴体に星印の付いた小型飛行機が低空飛行をしているので、どこの国かな？と先生と話していました。

その年の12月8日、大東亜戦争が始まりました。日本は神の国だから負けることはない“神風が吹く”とラジオの放送も勝った事ばかり知らせていました。

シンガポール陥落で提灯行列を行うなど、皆んな国中浮かれていました。

昭和20年になると戦争の様子が変わり、本土のあちこちで空襲があるようになりました。

私たち学生達も、学徒動員により、学校へ行っても勉強どころではなく、グループごとにその日の作業が指示されました。私たちは、阪神間（大阪と神戸の間の地域）にある酒造会社の焼跡で釘拾いなどをさせられていました。拾った釘は学校へ集め鉄砲にすると先生から聞かされました。

そのうち、私達に先生は「もう釘拾いは止めて酒造会社の倉庫の焼け跡には米も沢山残っている。焼けたお米を拾いなさい。」と言われ、倉庫の中で燻っているお酒の原料になる前の焼けたお米を拾い集め、ハンカチに包んで帰りました。玄米茶に入っている様なお米です。学校へ帰る途中、海辺へ廻り水筒に海水を入れて持ち帰る時、空襲警報が鳴り、急いで松林に逃げ込んでいました。友人が途中で「履物を忘れた」と浜辺へ取りに戻った時に、低空飛行の戦闘機に射たれて亡くなりました。子供であっても見境のない非情な行動に憤りを覚えました。

学校では、先生から「〇〇さん、〇〇さんが昨日の空襲で亡くなりました。」と悲しい報<sup>しら</sup>せばかりでした。

夏休みに入り、8月6日、阪神間の空襲で、私の家に小型爆弾が2個落とされ、家族6人が爆死しました。奇跡的に私は助かりましたが、体中の傷を見ても痛いと思わず涙も出ない、只家の中でボーッとしている女の子でした。

それよりも食べ物が無い方が苦しかったです。

その9日後、8月15日に終戦となり、喜んだ人、哀しんだ人・・・、私達には何が起きているのか判<sup>わか</sup>らない日々が続きました。

ある時、友人の親戚がお米を作っていると聞き、分けてもらいに行きました。あの頃は、お金より品物の方が良く扱われ田舎のおばさんに「あなたの着ているセーターと交換してあげる。」と言われ服とお米を交換して貰いました。

しかし、国が物資を厳しく管理していたこともあり、淡路島から明石へ渡る船に乗り、喜んだのも束の間、船を降りた時警察の人に捕まり、お米も没収されました。私の前に赤ちゃんをおんぶした人がいたが「ネンネコ」の中はお米で、帽子をかぶせていたのです。服はお米に変わり、そのお米が没収され、本当にくやしくて泣いたのもこの時でした。

私達は別の心配がありました。神戸へアメリカ軍が上陸して来たら男子は殺され、女子は連れて行かれると噂が広がり、毎日ヒヤヒヤの生活でした。しかしそんな事は全然なく、アメリカ兵にチ

チョコレートやチュウインガム等を貰った時は嬉しくて喜びました。

こんな惨めな思いは二度とあってはなりません。全世界は仲良く幸せに暮せるよう、平和を祈ります。

(原文のまま掲載しています)



親しかった兄と写る田村さん  
(右・昭和10年頃)